

一八八三年六月十日(日)

ドゥキネーシヨル
南神村において、マニラムプールおよびベルガリヤから来た信者たちと共に

〔聖ラーマクリシユナ、子供のころの性格行状を語られる〕

タクール、聖ラーマクリシユナは、寺院内の自室で立ったり坐ったりなさりながら信者たちと話し
ておられる。今日は日曜日、キリスト暦一八八三年六月十日、ジヨイスト白分五日。時間はまもな
く午前十時になるところ。ラカール、校長、ラトゥ、キシヨリー、ラームラル、ハズラー、その他大
ぜいいる。子供のころのことを語っておられる。

聖ラーマクリシユナ「郷里くでは子供のころ、男の人も女の人もみんなわたしを可愛がつてくれたよ。
わたしの歌をよく聞いてくれたものさ。その上、人真似がうまかつたものだから、それを皆して見物
してくれた。村の家の主婦たちは、わたしのために食べ物をとっておいてくれた。みんなわたしを信
用して、自分の家の子供のように扱ってくれたよ。

けれども、今になって考えてみると、わたしは呑気なお調子者だったんだねえ。幸福そうな、うま
くいっている家庭を見ると、始終出入りしていた。反対に、何か悩み事があったり、災難に見舞われ
たりした家からは逃げていったっけ。

若い連中の中から何人か気の合う人を見つけては、大そう仲よくしていたものだ。だが今では、昔の仲良したちも皆、世俗の生活にアクセクしてくたびれ切っている。今でも時々ここに訪ねてくる人もいるが、入ってくるなりこう言うんだ。『おやまア、あんたさんは、小学校にいたころとちつとも変らないねえ』って。

小学校では算術の符号がサツパリわからなくてね！ でも、絵はうまかった。それに、粘土で小っちゃなかわいい神像を上手にこしらえたものさ。

〔巡礼者の宿泊所やラーマヤナやマハーバーラタなどの講読会へ行くのを好む〕

巡礼や修行者の無料宿泊所を見つけるときつとそこへ行つて、長いこと立ちん坊して中の様子を眺めていた。

どこかでラーマヤナやバーガヴァタの講読会があると、必ずそこへ出かけて行って、前の方に坐つて聞いていたよ。語り手が身振り手振りをつけたりすると、あとでさつそくその真似をしてみせた。皆、面白がつて見物していたつけ。

女の人たちの振舞いも、よくわかつていた。言葉や話しつぶりなどよく真似をした。少女コレランリの未亡人リ（そのころの風習で、幼女が結婚式を挙げてそのまま実家に暮らしているうちに、相手が死亡したものが父親に呼ばれて、『はい。いま参りまアアす』ベランダから婆さま方が呼んでいる。『これ、魚屋さん！』身持ちのよくない女は一目でわかつたよ。未亡人のくせに髪の毛をきれいに分けてなでつけて、その上、せつ

せと体に香油を擦りこんでいるんだよ！ 恥ずかし気もなく、えらく目立った坐り方をするんだ。

まあ、世間話はこのくらいにしておこう」

ラームラルに、歌をうたうようにとおっしゃった。

いくさの場にはに舞いおどる

目もと涼しき美女は誰そ

雨雲かける稲妻か

血汐の地の白蓮か

この次にラームラルは、ランカーの王ラーヴァナの死を嘆くマンドーダリー妃の悲しみの歌（ラーマヤナ物語の一場面）をうたった——

何としたことか　ああ愛しい人よ

情けない姿におなりなされた夫つまよ

この世の生涯いのちが終わらなければ

まことの平安やすらひはないものなのか

黄金の国を支配したお方が

今日は大地の床に横たわる

このありさまにあなたの妻は

どのようにして耐えたらよいのか

死の王にさえ 召使いのように仕え

天地の間に創造主さえみとめず

比類なく雄々しき勇ましかった夫よ

インドラ神の妃にも劣らなかつた私は

ひとりの貧しい女となってこの世に残された――

苦行者となつて森に住むラーマは

偉大なシヴァ神や創造神ブラマーにさえ

羨まれているような 尊いお方

石になった人間もラーマの足にふれて

元通りに生き返つたという話さえ

何度申し上げても お取り上げにならず

かのラーマを ただの人間とお考えになつて――

〔ラーマの名にタクール恍惚となる――ゴープーの愛〕

この終しまいの方をお聞きになりながら、タクールは涙をぼろぼろこぼしながらおっしゃった――「わたしはジャウ樹ジュの下で用を足していると、ガンガーを下る小舟の漕こぎ手が、舳へ先さきでこの歌をうたっているんだよ。聞いていて、樹の下にしゃがんだままいつまでも泣いているものだから、人が来てわたしをかかえて部屋に連れ戻したものだよ」

髪束をつけたバラモン姿の

ラーマはただの人間ではなく

救世主(ワシユス)の化身だと聞いていながら

なぜシーター妃を盗みだしたりして

わが一族を破滅にみちびいたのか――

アクルーラ(クリシユナ)の伯父(おじ)がクリシユナを馬車にのせてマトウラーにつれて行こうとしているのを見て、牛飼ウシい乙女ヒメたちが馬車の車輪に腕を巻いて取りすがり、なかには馬車の前に身を横たえるも

のもいた。彼女たちはアクルーラを叱りつけた。彼女たちには、クリシユナが自分の意志で行こうと
しているのがわからないのだった――

つかむな　つかむな　この車

馬車は車で動くのか

車を動かすのは神さまよ(へり)

神の車で世界は進む

とめるな　とめるな　この馬を

馬は魔法の馬じゃない

恋に疲れたこの馬は

ゴクールの町に　もう用はない

(訳註)　ゴクール――クリシユナが幼少期を
過ごした町

馭者を叱るは無駄なこと

わたしにや　何の権限(ちから)もない

主のお指図のあるままに

どこなと馬車は行くのだよ

聖ラーマクリシュナ「ゴープーたちはどんなに慕っていたことか、どんなに愛していたことか。聖シュリーマティ女ラーターは自分でクリシュナの絵を描いたが、足だけは描かなかった。マトウラーに行つてしまわないようにだよ。

いま歌っているような歌を、わたしは子供の頃、よく歌つたものだ。芝居の場面を一つ一つ、皆おぼえていて歌つたものだよ。だから、わたしのことをカーリヤダマン劇団にいたんだろう、なんて言う人もいたほどだ。

一人の信者が新品の肩衣チャドルを身につけて入ってきた。ラカールは子供みたいな性格だから、ハサミを持ちだしてその人の肩衣チャドルの下の房を切り取りに行つた。タクールはおっしゃる——「これ、なぜ切るんだい！ そのままにしておけ。女の人のシヨールみたいで洒落しゃれてるじゃないか」

それから、その人に向かつて——「フーン、それはいくら位するものかね？」当時、イギリス製の肩衣チャドルは値下りしていた。

信者「対ペで一ルビー六アナでございます」

タクール「何だつて？ 対ペで一ルビー六アナで買えるのかい?!」

しばらくしてタクールは、「ガンガーで沐浴しておいで。この人に油をあげろ」とおっしゃつた。

その人が沐浴をして戻つてくると、タクールは棚からマンゴーを取り出してその人にあげ、こんなふうにおっしゃつた。「このマンゴーをあげよう。学位を三つも取つたんだからね。そうだ、あんな

の弟はどんな具合だね？」

信者「はあ、葉は与えまケスリしたので、あとはそれがうまく合えばいいのですが——」

聖ラーマクリシユナ「何か仕事の口を見つけてやれるかい？ あんたが保証人になっておやりよ」
信者「回復しさえすれば、いくらでも方法があります」

聖ラーマクリシユナ、マニラムプールの信者と共に

タクールは食事の後、小寝台で少し坐っておられたが、休息なさるとママもない。信者たちが集まり始めたからである。はじめはマニラムプールからひとかたまりの信者が入ってきて席についた。そのなかの一人は労働監督局で仕事をしていた人だが、今は年金で生活している。信者の一人がこの人たちを連れてきたのである。次にベルガリヤからきた信者たちが入ってきた。マニ・マリツクはじめ他の信者たちも漸次集まってきた。

マニラムプールの信者たちが、「お休みのところをお邪魔いたしました」と申し上げると、聖ラーマクリシユナはこうおっしゃった。

「いやいや、それはラジヤスの人間に言うことだ。あの方は睡眠をとっておられる！ なんてね」
チャナクとかマニラムプールとかの話をお聞きになって、タクールは子供の頃の友、シユリラムのことを思い出されたようである。「あの辺にラームの店があつてね、その村でラームとわたしはいっしょに小学校に通って勉強したんだよ。先だってここへ訪ねて来たよ」

マニラムプールの信者たちは、「どのような方法で至聖カミを覚えることができるか、何とぞお教え下さい」と申し上げた。

〔マニラムプールの信者たちへの教訓——祈りと讃歌、および熱心さが必要〕

聖ラーマクリシュナ「すこしは修行サイダナをしたり、讃神歌バジヤンをうたったりしなければね。

牛乳の中にバターがある」と、ただこう言っているだけではダメだ。凝乳カウドにしてかきまぜていると、はじめてバターがとれるようになる。だから時々、静かな処に独りで居ることが必要なのだ。三日かそこらでも静かな処で独りで瞑想して、信仰をつかんでからそれから後なら、どこへなと住んでもいい。靴をきつちり履いてからなら、いばらの茂みもやすやすと歩いていけるからね。

一番だじなのは信念だ。自分の信仰態度のものが得られる。その根本は信念だよ。信念が出来上がったら、もう何も恐れるものはない」

マニラムプールの信者「はい。——ときに、グルはどうしても必要でございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「大部分の人には必要必要なしだね。そして、グルの言葉を信じなくてはいけない。グルを神様だと思つて見ていれば、それが出来るはずだよ。だからヴィシヌ派の信者たちは、グルとクリシュナと信者は一体なり、と言っている。

あの御方の名をいつも念じていることが大切だ。現代のような末世カキユガには、称名が最高の力だ。物質に頼っている時代だから、昔のようなヨーガは出来ないんだよ。あの御方の名を称えて手を拍たてば、

罪の鳥は飛んでいってしまふよ。

それから、熱心に信仰している仲間との交流が必要だ。ガンジス河のそばに近づくほど涼しい風が当たるようになる。火のそばに近づくほど熱くなるだろう。のんびりやってちやダメだ。世間の楽しみにうつつを抜かしている連中は、『いずれ、そのうちに神様にもお目にかかるでしょう』といった調子だがね。

わたしはケーシャブ・センに言ったよ——『息子が待ちかねてじれじれしていれば、親は予定していた三年前でも財産を分けてくれる』とね。

母親が料理している間、赤ん坊を寝かせておシャブリをくわえさせておく。赤ん坊がおシャブリを落として泣き叫ぶと、鍋を下ろして抱きかかえて乳を飲ませてやる。こんな話もケーシャブに聞かせてやった。

末世時代カリュガ（物質万能主義の時代）だから、一日一夜も泣いて祈れば神様にお会いできる。責め立てるよ
うにこう言え——『あなたが私を創ったのだから、会ってくれるべきだ！』と。

この世にいろいろがどこにいろいろが、神様は人の気持ちをちゃんと見ていらっしやる。この世のものに

（原典註1）ヨーギーは常に心を至上者に置き

人里離れた所に独り住み —— ギーター 6・10 ——

（原典註2）グルの必要性 —— チャーンドーギヤ・ウパニシャッド 6・14・2 ——

執着している心は湿ったマツチ棒みたいなもので、いくら擦っても火が付かん。エーカラビヤという人は、土で自分の師匠のドローナの像を作って、その前で弓の練習をしたそうだ。

前進しる。木こりは先へ先へと進んで白檀の木を見つけ、銀の山を見つけて、金の山を見つけて、まだ先へ進んでダイヤの山を見つけた。

無智な人は土壁で囲った部屋の中に住んでいるようなものだよ。なかにも光はないし外のものも見えない。智慧を獲て、それからこの世で暮らしている人は、ガラス張りの部屋にいるようなものだ。内にも光、外にも光。内部のものも見えるし、外部のものも見える。

〔ブラフマンと宇宙の大実母は一つ〕

ただ一つのものがあるだけで、ほかには何もないんだよ。私がある間は、かの至高至聖のブラフマンが、アディヤシャクティ(根元造化力)という相で創造したり、維持したり、破壊したりしているように見せかけて下さっているだけだ。ブラフマンがアディヤシャクティなのだ。

ある王様が、『たった一言で朕に智慧をさずけよ』と、一人のヨーギーに申しつけた。ヨーギーは、『よろしい。たった一言であんたは智慧を得るだろう』と請け合った。しばらくすると、王の傍に突然一人の魔術師が現れて席についた。王が見ていると、彼は進み出て二本の指をグルグル廻しながら、『王よ、これを見よ。王よ、これを見よ』と言う。王は何のことか分からず呆氣にとられてただ見ていた。しばらく見ていると、二本の指は一本になってしまった。魔術師は一本になった指をグルグル廻しながら

ら、『王よ、これを見よ。王よ、これを見よ』と言っている。つまり、ブラフマンとアディヤシャクティははじめのうちは二つに見える。しかし、ブラフマンの智慧を得ると、もう二つは存在しないんだよ。同じなんだよ。一つなんだ！ 一つが二つになっているんじゃない——不二アトワフイタなんだ！」

ベルガリヤから来た信者たちと共に

ベルガリヤからゴーヴィンダ・ムコパツダエをはじめとする信者達が来た。タクールは先日、彼の邸宅を訪問されたのだが、そこで歌い手が、目覚めなさい、母よ！ 目覚めなさい、を唱うのを聞きになって三昧に入られたのであった。ゴーヴィンダはその歌手も連れてきたので、タクールは非常にお喜びになり、早速、何か歌うようにとおっしゃった。

(歌) 母なるシャーマよ 他の人に罪チナはなし

自ら掘りし井戸のなかで

私は溺れて死ぬばかり

(歌) 死よ 私に近づくな

私にはもう カーストはないのだ

ああ おまえは訊くのかい

どうやってカーストを捨てたのか

全てを破壊する御方が 私を出家修行者にしたからだ

(歌) ムーラダーラに長く眠れるクンダリニーよ

いざ頂上に昇るのが おんみのつとめ

主なるシヴァのもと 千瓣の蓮華に

六つの階段を通り すべての悲しみをとり去り

かの靈妙美麗なる至高の意識に

(訳註) シヤクティが浄化され、梵と二体になる意

聖ラーマクリシュナ「この歌には、六つのチャクラを通り抜けることがうたわれている。神は外にもいらつしやるし、内にもいらつしやる。あの御方は内から心の様々な状態をあらわされるのだよ。六つのチャクラを通り抜けると、マーヤーの領分から離れて個我は至上我と一つになるんだ。これを見神というんだよ。

マーヤーが戸口から退いてくれないと神様は見えない。ラーマとラクシユマナとシーターがいつしよに歩いていらつしやる。皆の先頭にラーマ、中間にシーター、後ろがラクシユマナだ。真ん中にシーターがいるものだから、ラクシユマナにはラーマが見えない。ちょうどそんな具合に、間にマーヤー

があるから人間には神様が見えないのだ。(マニ・マリツクの方を向いて) だがね、神様のお恵みがあればマヤーは戸口から退いてくれる。ちょうど、戸口の番人が旦那の命令で退くようなものさ。(原典註3)

ヴェーダーンタの考え方と、プラナーナの考え方と、二通りあつてね。ヴェーダーンタの意見だと、この世は、幻の幕、つまり、世界はすべて虚構で夢まぼろしのようなものだと言う。しかし、プラナーナの意見や信仰の書では、神そのものが二十四の宇宙存在原理になつておられる、と言っている。だから、あの御方を内にも外にも拝め、と。

私、という感じをあの御方が残しておきなざる限りは、あらゆるものがあるんだよ。夢まぼろしどころじゃない。下に火が燃えているから、鍋の中で豆だの米だのイモや菜っぱだのがゴトゴトしている。跳ね上がったりは、『私はいるよ、私は跳ねてるよ』と言い張っているように見える。身体が鍋で、心と知性が水で、感覚の対象が豆、米、イモ、菜っぱというわけだ。我ががそいつらのウヌボレで、『私がゴトゴトしているんだ!』と思つているんだよ。そして、サッチダーナンダ(実在・智慧・歓喜—プラフマンの実体)が火なのだ。

ところが又、信仰の書では、この世は遊び小屋だと言っている。ラームブラサードの詩に、この世は幻の幕とあるが、或る人がこれに対して、この世は遊び小屋だと応えた。大実母カーリーの

(原典註3) だがわたしにすべてを任せて帰依する者は

易々とこれをのり超えて行ける —— ギーター7・14 ——

信者は、肉体そのままで解脱して永遠の歓喜に満たされている。信仰者たちは、神がマヤーになっていらつしやるのだ、と見ている。あの御方が、生きとし生けるものとこの世界になっていらつしやるのだ、とね。神——マヤー——生物——世界、これを一つに見ている。ある信仰者は、『あらゆるものにラーマの姿を見る。ラーマがすべてになっておられる』と言う。またある信仰者は、ラーダーとクリシユナを見る。クリシユナこそが二十四の存在原理になっていらつしやるのだと。緑色のメガネをかけると何もかも緑色に見える。

それで、^{シヤクテイ}信仰の書^{シヤクテイ}では、力がすべてであるという意見だ。ラーマがすべてになっておられるのだが、しかし、シヤクテイはある場所には多く、ある場所には少なく^{あらわ}顕れている。いわゆる、神の化身^{シヤクテイ}はあの御方の顕れ方のひとつであり、普通の生物もひとつの顕れ方だ。神の化身にだつて肉体感覺はあるよ。身体を持つことがマヤーなんだ。シーター妃を慕って、ラーマは泣きなすつた。けれども、神の化身は自分から望んで自分の目に目隠しをしている。子供が鬼ごっこをするようにね。母親が呼ばず遊びはおしまいだ。だが、普通の人間は話が別だよ。かれらの目隠し布の後ろは、八つのピンでしっかり止めてある。八つの足枷^{あしかぎ}だ。恥ずかしい、憎らしい、恐ろしい、階級^{カキ}の誇り、血筋の誇り、品の良さの誇り、悲しみを引きずること、隠し立て——この八つの足枷だ。霊^シの師^シがとり除いてくれなければどうしようもない」

ベルガリヤの信者に対する教え——熱心に神に訴えるのが真正の信仰者のしるし

ベルガリヤの信者「あなた様から、恩寵を賜りますように——」

聖ラーマクリシユナ「あらゆるものの中にあの御方はいらつしやる。でも、ガス会社に申し込まないとね。そしたら、おまえの家にもちゃんとガス管を引いてくれるよ。

だが、熱心に頼まなくてはいけない。この世にある三つの引力を一つにまとめて頼めば、神様にお会いできる。母親が子供に感じる引力、貞淑な妻が夫に感じる引力、世間の人が自分の持ち物に感じる引力、この三つだ。

真正の信仰者を表す特徴がある。グルの教えを聞いて落ち着いていること。蛇使いが口笛を吹いていると、キングコブラは傍でジーツとして聞いているだろう——ただのコブラじゃないよ。もう一つの特徴は、理解力が強くなることだ。写真のようなものでね。ただのガラスの上には絵像が写らないが、感光液を塗ったガラスの上だとちゃんと絵が写る。信仰がこの感光液にあたる。

それからもう一つの特徴は、自己抑制ができることだ。色欲を抑えることができる。牛飼**ゴ**い乙女**ビ**たちには色情は全然なかった。

お前たちが社会生活をしているからつて、それがどうしたというんだい？ 修行をするのにかえつて都合がいいくらいのものだよ。ちようと、城塞**とりで**の中から戦争をしていようなものだ。死骸の上に坐つ

- (原典註4) クラルナヴァ・タントラで説かれている足枷は次の八つ——(1) 恥ずかしさ (2) 憎しみ (3) 恐れ
(4) 階級カキの誇り (5) 家柄の誇り (6) 品の良さの誇り (7) 猜疑心 (8) 隠し立て

てタントラ修行をしているとき、時々、死骸が口をアーンとあけて皆を驚かすことがあるだろう。だから、そばに揚げ米なんかを用意しておくんだ。口の中にときどきそれを入れてやる。そうやって、死骸をなだめながら心配なく称名をしているわけだ。それと同じで、家族たちの気持ちを安定させておかなくてはいけない。養っている用意をちゃんとしてから修行をすれば、万事好都合にいくよ。

苦楽の経験がまだ少しし残っている連中は、普通の生活をしながらあの御方を呼べることになつてゐるのだ。ニティヤーナンダの規則きまりにこうあるよ。女房のつくつた魚イサナのスープ、若い女の胸のふくらみ、それから神ハリの御名を称えること。(訳註——ニティヤーナンダの規則きまりについては、一八八二年十月二十八日のコタムリトで聖ラーマクリシュナが詳しく述べている)

しかし、真正正銘の出家の場合は話が全くちがうよ。蜜蜂は花にだけ止まってほかの場所には止まらない！ チャタク鳥にとつてはどの水もダメ。ただ、スワティー星が昇ったときに落ちる雨だけを飲みたくてクチバシをあけて待っている。真正正銘の出家は、ほかのどんなことも楽しくない。ただ神のことを楽しんでゐる。蜜蜂は花にだけ止まる。真正の出家修道者は蜜蜂のようだ。並の信仰者は蠅ハエのようだ。お菓子(サンデシユ)の上にも止まるし、糞の上にも止まる。

お前さんたち、遠いところから苦労して此処へやってくるが、神様を探して歩いているのかい？ 大方の人は庭を眺めて満足しているだけで、庭の造り主のことを聞くのはほんの一人、二人だ。この世界の美しさがわかつて、その造り主を探そうとしない」

〔ハタ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガとベルガリヤからの信者——六チャクラの区別と三昧〕

聖ラーマクリシュナは歌い手に目を向けられて——

「この人はいま、六つのチャクラの歌を唱ったね。あれはヨーガの話なんだよ。ハタ・ヨーガとラージャ・ヨーガというのがある。ハタ・ヨーギーは体のあちこちを一生懸命鍛練する。その目的は超自然力を得たり、長生きをしたり、神通力を身につけたり——こういうことが目的なのだ。ラージャ・ヨーガの目的は信仰、愛、智慧、離欲——ラージャ・ヨーガはいいね。

ヴェエーダラントで言う七住地と、ヨーガスートラの六チャクラは大そうよく似ている。ヴェエーダの最初の三住地は、あっちのムーラダーラ、スワディスターナ、マニブーラにあたる。この三つの住地では、肛門と生殖器とへそが心の住地だ。心が第四の住地上がると、つまり、アナハタの蓮にとどくと、個霊に炎のようなものが見え、次に光が見えてくる。修行者は、『何だろー！ これは何だろー！』と言って驚く。

五番目の住地に心が上がると、ただもう神についての話ばかり聞きたくなる。ここがヴィシュツダ・チャクラだ。第六の住地とアジナー・チャクラは同じだ。ここに心が上がると神様にお会いできる。だが、ランタンの中の光のようなもので、触れることはできない。間にガラスの幕があるからね。

ジャンカ王は第五の住地に心をおいて、そこからブラフマンの智慧を人に教えなすった。あの方は、時には第五住地に住んでいらっしやったり、時々、第六住地上がっていらっしやったりしていた。

六つのチャクラをたどって、最後が第七住地だ。心がそこへ行くと心そのものが消えてしまう。個

靈と至高靈が一体となって三昧に入る。肉体感覚はなくなるよ。外界は消え去って虚空となる。いろいろな智識はなくなつて考えることもできなくなる。

トライランガ・スワミは言っている——『分別するから多くのものがあると感じ、様々な感じ方がある。三昧に入れば、二十一日たつと肉体は滅する』と。

とにかく、クンタリニーが目覚めなければ靈意識は起こつてこないんだ！」

〔神を覚つたしるし〕

「神をつかんだ人には特徴しるしがあるんだよ！ その人は子供のようだったり、狂人かバカのように見える。その人は、『私はただの道具、神が使い手。神がすべての行動者。ほかは皆、あやつり人形』ということが心底からはつきりわかっている。シーク教徒がよく言っているように、『木の葉の落ちるのも神の思召し』ラーマの御意志で何事も起こる、こういう悟りだ。ほら機織はたおり職人が言つただろう——『ラーマの思召しで反物の値は一ルピー四アナ。ラーマの思召しで強盗に遭あつた。ラーマの思召しで泥棒が捕まつた。ラーマの思召しでお巡りが私を連れていった。そしてラーマの思召しで私を放してくれた』

夕方になつたが、タクールは一度もお休みになつておられない。信者たちと絶えず神の話をしていらつしやる。いま、マニラムプールとベルガリヤから来た信者たちや他の信者たちが、タクールに頼たのずいてお別れの挨拶を申し上げた後、神殿で神々にお詣りしてから、それぞれの地方に帰つて行つた。